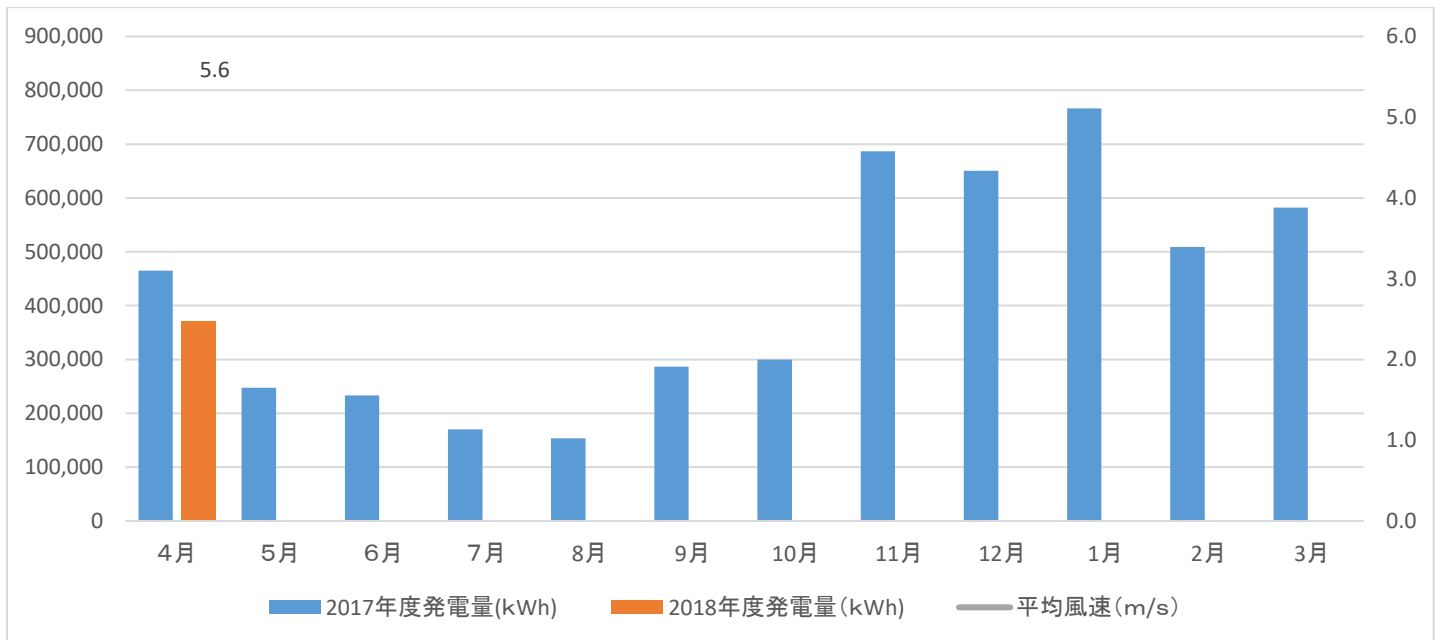


秋田県にかほ市に生活クラブ東京・神奈川・埼玉・千葉が建設した生活クラブ風車「夢風」に関するニュースをお届けします。

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町1-6-9 大内ビル3F 一般社団法人グリーンファンド秋田

発行責任者 半澤彰浩(代表理事) 編集責任者 鈴木伸予

○ 発電実績



風車「夢風」運転状況について

- 風況は前年に比べて1.4m/s 低い実績となりました。
- 4/26に連系柱の高圧電線に営巣していたカラスの巣が線間短絡を起こし停電となりました。同日に撤去作業をしました。

	発電量 (kWh)	平均風速 (m/s)	稼働率 (%)
4月	370,505	5.6	96.6
5月			
6月			
7月			
8月			
9月			
10月			
11月			
12月			
1月			
2月			
3月			

2017年度第5回グリーンファンド秋田理事会報告

2018年5月11日(金)に開催しました。

主な議案は、2017年度事業活動報告及び決算報告、2018年度事業活動方針案及び予算案、役員の辞任に伴う役員候補の推薦、第10期社員総会の議事日程についてなどです。

2017年度の年間発電量は5,051,450kWhで、前年比103.0%、計画比106.8%となりました。平均風速は6.5m/sで前年比110.2%、稼働率は90.6%で前年比97.1%、設備利用率は29.1%で前年比102.5%となりました。7月に風車ブレードの補修を実施しましたが、順調に運転稼働しています。また、2017年度は東北電力による解列の要請が多く発生しました。

2018年度の方針案では、年間発電量4,731,400kWhを計画します。また、にかほ市と生活クラブ首都圏4単協、グリーンファンド秋田による「地域間連携による持続可能な自然エネルギー社会に向けた共同宣言」にもとづき、連携推進協議会の方針実現に向けて取り組みをすすめます。連携推進協議会の基に設置されている「夢風ブランド生産者連絡会」の事務局機能を担い地域間連携を広げます。

バイオガスプラント見学報告

グリーンファンド秋田理事会で北海道のバイオガスプラントの見学を行いました。

バイオマスリサーチ株式会社の常務取締役竹内良曜氏にご案内とコーディネートを頂きました。バイオガスプラントは、酪農家の糞尿や農作物残さを、メタン発酵槽で熱を加えて40日程度嫌気性発酵させ、発生したバイオガスで発電と熱利用を行い、発酵後の液体(消化液)は肥料として農地にまくという地域循環型のシステムです。プラントの種類には何軒かの酪農家から糞尿を集めて処理する集中型と、酪農家が自分のところで処理する個別型があり、今回はこの2種類の施設を見学しました。

鹿追町環境保全センター(集中型)

鹿追町は十勝平野の北西に位置し、農業と観光を基幹産業とする人口6000人の農村地帯です。開発当時、鹿追町の課題として、農業と観光の発展と両立、乳牛ふん尿の悪臭、バイオマス資源の有効活用が挙げられていました。その解決のために鹿追町がバイオガスプラントを備えた環境保全センターを建設しました。2007年から稼働し、成牛1200頭のふん尿処理を行っています。発電量は約6,200kWh/日。



(ふん尿の搬入・計量)



(原料の投入口)



消化液は酪農家や畑作農家の圃場に液肥として散布され、2014年度には全体の約9%の圃場に散布されています。

また、余剰熱熱を利用した、マンゴー栽培、チョウザメ陸上養殖、サツマイモ栽培がおこなわれていました。

土幌町(個別型)

土幌町の農業は、畑作 335 戸 9350ha、酪農 67 戸生乳 89716t、肉牛 28 戸 49205 頭で、人口は 6,242 人です。バイオガスプラントはJA土幌町が事業主体で建設し、酪農家に管理運営・実証業務を委託する。発電した電気はJAが買って、酪農家や組合員に売電する仕組みです。

バイオガスプラント導入の背景には、酪農家の飼育頭数の拡大に伴い、飼育形態がフリーストールに変化したことで、ふん尿の処理に係る労働力が増大し、とても困っていたことがあります。バイオガスシステムのメリットは、ふん尿処理作業が大幅に軽減し、悪臭もほとんどなくなり、余剰熱を牧場内で使うことができ、トラブルも少なくシンプルだということです。さらに、消化液を地域の畑作農家で使うことができ、耕畜連携の循環型システムです。

まず見学したのは、(農)佐々木牧場です。事業費 417, 00 千円(補助金 128,634 千円)、フリーストール・ロボット牛舎、400 頭、投入原料量 32t/日、発電機 150kWh1 台(計画3,000kWh/日)。

牛舎の中では、乳牛が自由に行動し、搾乳したくなったら自分でロボット搾乳機のところに行きます。ロボット搾乳機は、牛の個体番号でその牛の乳量から健康管理まで行っているとのこと。ふん尿も自動で集められ、発酵槽に投入されます。バイオガス発電からでた余剰熱で、固形分を乾燥し、敷料として牛舎で再利用しています。また、余熱を牛舎の搾乳機等で使うことで厳寒対策に活用しています。

次は、(有)大木牧場です。事業費660,000千円、フリーストール牛舎、850頭、投入原料量68t/日、発電機150kWh2台(計画5,387kWh)。このプラントも佐々木農場と同様ですが、規模が大きいので発酵槽が2基あります。また、消化液の適期な効率的圃場散布のために貯留槽を2か所に分散設置しています。



(JA 土幌町の方に説明頂きました)



(左:固形分乾燥機、右:発電機)

芹田営農組合で加工用トマトの定植が行われました

生活クラブ風車「夢風」の地元の芹田地区の芹田営農組合で、5月13日に加工用トマトの定植がおこなわれました。

芹田自治会の荒川定敏会長より写真を頂きましたので、ご報告致します。



「夢風」の取り組みが朝日新聞に掲載されました

2018年4月16日(月)朝日新聞の夕刊の全国版の1面に、生活クラブ風車を通じた、生活クラブとにかほの取り組みの記事が掲載されました。佐藤勘六商店の佐藤玲さん、芹田自治会長の荒川定敏さん、グリーンファンド秋田代表理事の半澤彰浩さんのコメントが紹介されています。記事の一部をご紹介します。

秋田と首都圏 風車が結ぶ縁 売電益で交流 特産品開発や見学会

秋田県南部・にかほ市にある風力発電の風車が、注目されている。名前は「夢風」。東京電力福島第一原発事故の翌年の2012年に稼働した。以来、地方から首都圏に電気を送るだけでなく、都会から地方に活力をもたらす取り組みが特徴だ。…そこで「地域に資する風車」を目指すことに。グリーンファンド秋田の代表理事で生活クラブ神奈川専務理事の半澤彰浩さんは「戦後、金も人も食糧もエネルギーも、都会が地方から吸い上げてきた。それを変えていくことで豊かな社会、持続可能な社会になるのでは」と話す。

また、4月18日(水)朝日新聞朝刊の秋田版にも同じ記事が掲載され、伊藤製麺所の伊藤実さんのコメントも紹介されています。